
バカとテストと風紀委員

タケル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと風紀委員

【Nコード】

N8558S

【作者名】

タケル

【あらすじ】

『特別風紀委員』という新しい役職で文月学園に転校してきた天才「尾形龍介」の波乱に満ちた学園生活。

オリキャラ設定

オリキャラ設定

尾形龍介

性別 男

年齢 17

性格 基本的には真面目。バカテスのなかでは比較的常識人。しかし、完璧なわけではない。

備考 1

文月学園の学園長藤堂 カヲルの甥。学年主任や鉄人と互角の頭脳を持つ天才。その頭脳を活かしているんな国で科学者として活躍していた。試験召喚システムのメンテナンスを手伝った際にカヲルに『特別風紀委員』という新しい役職をつくってもらい文月学園に転校してくる。

生まれた所が木下家の近所だったため優子と秀吉とは幼馴染。小学校にあがるとき引越すがそこが明久のマンションの隣だったため明久や姫路とも面識がある。小5のときに海外に引越したため4人とは長い間連絡をとっていなかった。

* 龍介の転校は2 - FVS2 - A戦後になります。

オリ設定

『特別風紀委員』

新学期早々試召戦争を仕掛けたり、『観察処分者』 『FFF団』

など多くの問題を抱えた2 - Fの話聞いた龍介が学園の生徒が社会に出ても大丈夫な人間に更生させるために作った役職。

教師と生徒の中間に位置し教師と同じように問題を起こした生徒を取り締まることができ、また召喚フィールドを展開することも出来る。そのかわり本人は試召戦争に参加することができない。

プロローグ

「本当にいいんだね？」

「ああ」

ここは文月学園学園長室。 学園長である藤堂 カヲルとその甥、尾形龍介が話しをしていた。

「しかしあんたもモノ好きなやつだね。 メンテナンスを手伝うかわりにこの学園入学させるだなんて」

「そうでもないですよ。 それにこっちはわがままいって特別な役職まで作ってもらったんです。 むしろ感謝してますよ。」

「『特別風紀委員』かい。 しかしこの学園のバカどもの相手をするのは大変だよ？」

「学園長、自分の学園の生徒に対してそんなことを言っではいけませんよ」

「・・・あんたもうるさいやつだね」

カヲルはこの学園のバカどもの相手をするのは大変だと言い、すると龍介は自分の学園の生徒をバカにするのは良くないと言い、カヲルは龍介の真面目さのため息をついた。

「まったく、そんなだから生徒に尊敬されないんだよ」

「なんだい、敬語を遣うのはもう限界かい？」

「べつに。これからはあんたにも敬語を遣わないといけなくなるからいまぐらいは普通に話そうとおもってな」

「もともとわたしは年上なんだから敬語を遣うのは当然だと思うんだけどね」

「そういうのは、せめて俺の力なしでも試験召喚システムを不具合なく動かせるようになってから言いな」

「・・・あんたも口の減らないガキだね。そんなんで生徒指導なんてできるのかい？」

「大丈夫だ。たとえ口は悪くても常識はあるからな」

「そうかい」

「じゃあ、俺はこれから各クラスに説明まわりをしないとイケないからもういくぞ？」

「ああ、そうかい、行ってきな」

そうやって龍介が学園長室を出ようとしたとき、またカヲルが話しかけてきた。

「しかし、あんたもなんでまた急にこの学園に来たいなんていいだしたんだい？」

「ん？」

「あんなならいまさら日本の高校を卒業する必要はないだろうし、こんなことをするよりか研究をするほうが好きだろうに、どうしたのかとおもってね」

「ああ、そのことか。ちょっとした用事があったな」

「用事？なんだいそれは？」

「なに、たいしたことじゃないさ」

「もったいぶってないで早く話しな」

「……生徒のプライバシーに干渉しすぎだぞ学園長。」

「うるあいさね。甥のことを叔母が聞いてなにがわるいさね」

「……まあいい、べつに隠すことでもないしな」

「だから早く話しな」

「うるさい。なに、この学園に恩をかえしたいやつがいるんだよ」

そうつげると、龍介はこれ以上カマルに質問されないように足早に学園長室をでた。

第0章第1話

(次がいよいよFクラスだな)

Aクラスから順に説明を終えた龍介はFクラスに向かっていた。

(・・・いくら設備に差をつけるのがこの学園の特色だからってこれはあんまりだろう)

Fクラスの前まで来た龍介はFクラスの噂以上の設備の悪さに驚きつつも廊下で呼ばれるのを待っていた

「尾形入っていいぞ」

しばらくするとこのクラスの担任である西村教諭からよばれた。

「失礼します。」

そう言っつて龍介は教室に入った。

「尾形、自己紹介を頼む」

「わかりました」

龍介は自己紹介をはじめた

「今日からこの学園に『特別風紀委員』として転校してきた尾形龍介です。よろしくおねがいします」

最初から失敗しないように龍介は無難な挨拶をするが……

「ちつ。やっぱり転校生は男かよ!!」

「ただでさえ設備が悪くなったばかりなのによけい教室がむさ苦しくなるのかよ!!」

「俺達に潤いをよこせ!!」

転校生が男子だと知ったFクラスの男子のほとんどは不満を爆発させ龍介の挨拶など聞いてなかった

(……まあ、予想ど通りの反応だな)

しかし龍介も聞いていた話からこの反応は予想できたようで特に気にすることなく自己紹介を続けようとする

「さて」

「ん？ なんですか？」

しかしそこで一人の生徒が龍介に質問してきた

「おまえがさつき言っていた『特別風紀委員』ってのはなんだ？」

(一番最初に『特別風紀委員』について質問してきた。なるほど、あいつが坂本雄二みたいだな)

龍介はほとんどの生徒がスルーしていた聞きなれない言葉であるはずの『特別風紀委員』について質問してきた生徒を坂本雄二と判断

第0章第2話

「『特別風紀委員』というのは教師と生徒の中間に位置し教師と同じように問題を起こした生徒を取り締まることができたり召喚フィールドを展開する権限を持った役職です。そのかわり本人は試召戦争に参加することができないんですけどね。」

「そんな役職は今までなかったはずだが？」

「そりゃそうですよ。僕が新しく作ったんですから」

「!?!?……それはどういうことだ？」

「大人の事情により話せません。」

「とぼけるな！」

龍介が『特別風紀委員』について説明すると雄二は今までそんな役職なかったはずだといいい龍介が大人の事情だというと雄二はとぼけるなといつてひきさがらない

「はあ。じゃあ正直にはなすぞ。ここの学園長が俺の叔母でこの学年には問題児が多いっていったからメンテナンスを俺が手伝うかわりにこの役職を作ってもらったんだよ。この学園の問題児を社会に出ても大丈夫な人間に更生させるためにな。さあ、全部話したぞ？これで文句はないな!!」

いい加減同学年に敬語を遣うのに疲れてきたのか龍介は素の口調に戻ると『特別風紀委員』が作られた経緯をいつきに説明した。

第0章第3話

(なんだ急に怒り出したぞ！)

(今までののはキャラ作りだったのか！?)

(それより あいつが言ってることってどおいうことだ？だれかわかったか?)

(だめだ さっぱりわからん)

Fクラスの生徒たちは龍介のあまりに急な態度の変わりように困惑していた。

……というよりそもそもクラスのほとんどが龍介の説明を理解できていなかった。

「……その問題児っていうのはまさか俺たちのことじゃないだろうな？」

「なんだよくわかってるじゃないか」

「なんだとー!!」

雄二は龍介のいう問題児が自分たちのことじゃないかと聞くと龍介はそのとうりだと答え問題児扱いされた雄二は当然のように怒る。

『『『坂元どういうことだ』』』

「こいつは俺たちを問題児扱いしてコネを使って『特別風紀委員』なんてわけのわからない役職を作りやがったんだ。」

『『『なんだつて!!!』』』』

雄二の説明でようやくことの次第を理解したクラスのメンバーは抗議の声をあげる。が、

「新学期早々試召戦争をしかけたA級戦犯やFFF団なんて胡散臭いカルト集団が自分のこと棚にあげてなにいつてるんだよ。」

そんな抗議を一切きにくることなくお前たちが悪いと龍介は一蹴する。

「試召戦争を学期早々やつちゃいけないなんて決まりはないはずだ!!!」

「そうだおまえなんかにとやかく言われる筋合いなんてない!!!」

『『『俺たちはカルト集団なんかではない!!!』』』』

しかしクラスの連中も龍介に指図される筋合いはないと反論する。

このままではそのうち喧嘩になりそうな険悪な雰囲気クラスに漂いはじめたが、

「いい加減にせんか!!!」

西村教諭の怒号によりなんとかその場は収まったのだった。

第0章第4話

「西村先生すみません。僕も熱くなりすぎました。」

「……まあいい、それより『特別風紀委員』についての説明をもう少し詳しく頼む」

「はいわかりました」

龍介はあつくなりすぎたことを西村教諭に謝ると西村教諭はそれよりも『特別風紀委員』についての説明を詳しくするように言い龍介もそれに答え説明を再開する。

「さっきはすまなかった。おれもあつくなりすぎた。別にお前たちだけが問題児じゃないからな」

「俺たちが問題児なのは訂正しないんだな」

「ああ、さっきもいったがそれは事実だからな」

「なんだと!」

「だからやめんか!!!」

「……ちい」

龍介はさっきのことを謝りこの学年の問題児はFクラスだけじゃないといい、しかし雄二は自分たちを問題児扱いは訂正しないのかと聞くと龍介はそれは事実だから訂正するつもりはないと答

えそれを聞いた雄二はまた怒りですが、西村教諭に怒られとりあえずはしずかになった。

「説明の続きをするぞ？『特別風紀委員』っていつでも普通の風紀委員より少し権限が強いだけだ。なにも問題が起きなければ普通の生徒と変わらない。授業だってうけるし問題を起こせば当然俺も怒られる。まあこの学園らしく召喚フィールドを展開することが出来たり、試召戦争に参加することができなかつたりと一部普通じゃないところもあるが普通の生徒と同じように接してくれ。」

……まあ問題を起こすやつには容赦しないがな」

「説明はこれくらいでいいだろう。お前たちも新しいクラスメイトと仲良くするように。尾形、空いてる席に座ってくれ」

「わかりました」

一通り『特別風紀委員』について説明すると西村教諭は龍介に座るようにいい、龍介は空いてる席を探し座った。

第0章第4話（後書き）

どうもはじめまして、作者のタケルです。

これが『なるつ』初挑戦となります。その上機械音痴のため早くも悪戦苦闘しております（苦笑）

なれないうえに進学校に通っていてあまりパソコンを使える時間がないため、更新は遅くなるとおもいますが、見ていただけたら幸いです。

感想は随時募集中です。皆様のアドバイスがいただけたら嬉です。

ではまだまだ未熟な物書きですが、皆さん、よろしくお願い致します。

第0章第5話

休み時間

(早くクラスに馴染むためにも先ずはクラスのやつに話しかけてみるか。さて、だれから話かけたものか……ん？あいつもしかして)

「おい」

「ん？なんじゃ？」

「おまえ、もしかして秀吉か？」

「いかにもわしの名前は秀吉じゃが おぬしどこかであったことでもあつたじゃろうか？」

(やっぱりか。名簿を見たときこいつの名前があつたからもしかしたらとおもつたが、やっぱりそうだったか)

「なんだ忘れたのかよ、俺だよ俺、昔一緒に遊んだじゃないか」

「んーそついえは尾形龍介という名には聞き覚えがあるような……あ！ 尾形龍介つてまさかおぬし昔近所に住んでいたあの尾形龍介か？」

「ああそつだよ やつとおもいだしたか」

「おお！そつじゃったかひさしぶりじゃの」

「なに秀吉？あんた転校生としりあいな」

龍介はクラスメイトの中に以前近所だった『木下秀吉』を見つけ話しかける。秀吉は最初は龍介のことを忘れていたが、龍介と話すうちに思い出す。するとそこに2人の会話を聞いた女子生徒『島田美波』が話かけてきた。

「島田か 実は龍介は昔わしの近所に住んでおつての、そのころは姉上と3人でよく遊んだ仲なのじゃ」

「へええ そうなんだ」

「ああそういうことなんだ。改めて、俺は尾形龍介 よろしくたのむ」

「どうも 私は島田美波 こちらこそよろしくね」

そうやって3人が話していると、

「転校生が秀吉と知り合いだって！！！！」

「なんてうらやましいやつなんだ！！！！」

「しかも、もう島田とも仲良くなっていやがる！！！！」

「このままではまずい！直ちに転校生を排除せよ！！！！」

『おおおオ！！！！！！』

なにやらクラスがさわがしくなっていた。

(こいつらが例のFFF団だな。噂どりの連中だな。俺の理想の学園にはこんな危険な連中を野放しにしとくわけにはいかない。さて、とりあえず初仕事といきますか)

「総員がかれ!!!」

『おおおオ!!!』

「ふん、甘いわ!!!」

『なにい!!!』

FFF団会長『須川亮』の掛け声で50近いクラスの生徒がカッターナイフを手に龍介に突撃するも龍介はあわてることもなくいつの間にか握られていたモデルガンを使いFFF団全員を撃ち抜き、教室には生徒達の屍が積み重ねられた。

第0章第6話

「そんなバカな」

「俺は『特別風紀委員』だっていったろ、お前たちFFF団用の対策もしてるにきまつてるだろうが」

須川は急襲をあっさり返されたことに驚くが龍介は自分は「『特別風紀委員』なのだからこれぐらい出来て当然だと言っ」。

「龍介よ、その銃はいつのまに取り出したんじゃ？」

「こいつは取り出したんじゃない、出現させたのさ」

「出現させた、じゃと？」

「ああ、観察処分者のシステムをいじってたら偶然成功してな、予め登録した物体を試験召換の要領で出現させることができるようにしたのさ」

秀吉は龍介にいつの間に銃を取り出したのか聞き、龍介は取り出したのではなく出現させたと言い、偶然成功した経緯を話す。

「それ本当なの？」

「うそだったらさっきのことはどう説明する」

「ってことは本当みたいね。でもどうして高校生にそんなことが出来るのよー!」

「昔からこう言うのは得意でな、学園長の知り合いの研究者たちと話をしたり、海外の研究チームに交じって研究に携わったりしてたからな、こらぐらいできるさ」

「……………あんなにもものなのよ」

「べつに、只の普通の高校生さ」

「……………どう考えてもふつうじゃないとおもっのじゃが」

美波は龍介に本当か？と聞き、龍介の返事を聞き信じるもどうしてそんなことが出来るのか聞き、龍介は得意なことだから出来て当然だといい、美波に何者かと呆れられ、龍介は普通の高校生だと答え、普通では無いと秀吉にも呆れられる。

第0章第7話

「それにしてもこのクラスの連中の頭はどうなってるんだ？ クラスメイトと話してただけで、転校初日の転校生に50近い人数でカッターで襲ってくるなんて正気の沙汰とはおもえないぞ？」

龍介はFクラスの非常識さに呆れるが……

「だから、それを簡単に凌げるあんたも普通じゃないってば」

「こんぐらい出来なきゃ『特別風紀委員』なんて勤まらないからな」

50人近い生徒を一人で倒したことで逆に美波に呆られるが、龍介は『特別風紀委員』ならこれぐらいできないといけないと答える。

「まったくこんなことばかりしてるからこのクラスの男子はもてないんだ。まあ、それがわからないのがFクラスなんだが……っておっと危ない！」

「……………はずしたか」

龍介が自分たちの行動が余計に自分たちの首を絞めていることに気づいていないFクラスの男子たちに頭を悩ませていると、背後から手にカッターをもった男子生徒の襲撃を受けるも気配に気づき回避する。

「俺の攻撃をかわしたうえに今の素早い攻撃……お前がムツツリー二こと土屋康太だな？」

「……………だったらどうした」

「まずはその前にそのカッターをしまっつけてくれ。でないと落ち着いて話も出来ん」

「……………異端者は抹殺」

「またまた、俺はただクラスの女子と話をしてただけだぞ？お前だって島田や秀吉と話しぐらいするだろう、おれはそれさえできないなんつてのはあんまりじゃないか？」

「……………わかった」

康太は龍介の言うことももつともだと思ったのかカッターをしまう

「龍介わしはおとこじゃぞ！…！」

「ああ、そうだったな、すまんすまん」

秀吉は龍介の話の中で自分も女子に数えられていることに気づき抗議し、龍介も素直にそのことを詫びる

「……………話を聞こう」

「いや、今ここでするのはまずい、後で声をかけるからそのときにきてくれ」

「……………わかった」

康太は龍介に話を聞くといいが、龍介は「ここじゃまずいと答えまた

後で来るようにいい、康太もうなずく

「ちょっと尾形、あんた土屋となにはなすつもり？」

ここで2人の会話を怪しく思った美波が話しにわりこんでくる

「すまんがそれはまだいえない」

しかし龍介はまだ話せないという

「…へんなことじゃないでしょうね？」

「俺の仕事は学園の風紀をまもることだ。心配しなくても問題ない」

美波は2人が変な話をしないか疑うが、龍介は自分の立場的にそんなことはしないから大丈夫だと答える

「…だいじょうぶかしら」

「龍介なら心配いらんじゃだろう」

美波はそれでも大丈夫か心配すると、秀吉は龍介なら大丈夫だろうと答える。

第0章第8話

「ねえ、木下」

「何じゃ島田？」

「あんた尾形ってどういうやつなの？あんたあいつの知り合いなんでしょ」

「んー、知り合いといっても小学校にあがるときに引越してしまったからそれからあやつがどう変わったかはわからないのじゃが、わしと遊んでいたころは真面目で正義感の強い男じゃったぞ」

美波は龍介がどんなやつか秀吉にたずね、秀吉は昔遊んでいたころは真面目で正義感の強い男だったと答える。

「そうなんだ。」

「うむ、『特別風紀委員』という役職を作ってまで学園の風紀を守ろうとしているところを見ると今もかわっていないようじゃな」

秀吉の答えに美波は頷き、秀吉は龍介は昔と変わっていないと続ける。

「だから心配しなくても龍介に任せておけば大丈夫じゃろう」

「まあ、木下がそういうなら大丈夫かしら」

秀吉は龍介に任せても安心だといい、美波も秀吉がそういうなら大

丈夫かなといちよう納得する。

「そんなことより、明久はどこだ？このクラスのはずだが」

「なんじゃおぬし明久を知っているのか？」

「ああ、小学校に上がるときに引っ越したときその引越し先がアキの住んでいるマンションの隣の部屋だったんだ。だから同じ小学校に通っていたのさ」

「なるほど、そうじゃったか」

「そういうことだ。もっとも小5のときに海外に引っ越してそれ以来連絡取ってないからあいつはおれのこと忘れてるとおもうがな」

「明久ならその可能性も否定できんのか」

龍介は明久はどこかと聞き秀吉は龍介に明久を知っているのかと聞き、龍介は明久と同じ小学校に通っていたと話す。

「で、アキはどこだ？」

「アキならさっきあなたに倒されてその屍の中にうもれてるわよ」

「なに！」

明久は先ほど龍介襲撃に参加しており、ほかの生徒と共に龍介に葬られていた。

第0章第9話

「アキ、大丈夫か!」

龍介は慌てて明久に駆け寄る。

「いてて…君、いきなりこんなことするなんて酷いじゃないか!」

「いや、先に襲われたのは俺なんだけど…」

明久は龍介に攻撃されたことを酷いと言うが龍介は先に襲われたのは自分だとあきれる。

「尾形、アキにそんなこと言っても無駄よ」

「明久なら仕方あるまい」

「それが明久と言う男だからな」

美波に秀吉、それにいつの間にか近くにあった雄二の3人は明久にそんなこと言ってもむだだと言う。

「これって、ほめられてるの?」

「いや、間違いなくバカにされている」

「なにー!」

しかし明久は自分が褒められていると勘違いし、龍介にバカにされ

ていると指摘され怒り出す。

「…自分で気づけないなら否定できんとおもうのじゃが…」

「仕方ないわよ、だってアキなんだから」

秀吉は自分で気づけなかった明久にバカと言われても仕方ないと言
い、美波は明久なら仕方ないと言う。

「みんな酷いよ!！」

「まあまあとりあえず落ち着け」

「んーしかたないな」

龍介になだめられてとりあえず落ち着く明久

「あれ?それよりどうして僕のことしてるの」

「やっぱりわすれてたか…」

明久は龍介になんで自分のことを知っているのか尋ねるが、龍介は
忘れられていることは予想していたので特に驚かない。

「お前は忘れているようだが俺とお前は同じ小学校に通ってたんだ
ぜ?」

「え!それ本当?」

「ああ、本当だ」

「あれー、でも尾形龍介なんていたかな？」

龍介は明久と小学校時代同級生だったと話し、しかしやはり明久はおもえだせずない

「尾形、完全にアキに忘れられてるわね」

「龍介も不憫なやつじゃのう」

「……………龍介がかわいそう」

未だに思い出してもらえない龍介に美波、秀吉、康太の3人は同情する。

「まあ、お前なら間違いなく忘れてるとおもったからな、今日はこいつをもってきたんだ。これをみればさすがのお前も思い出すだろう」

そう言っつて龍介はポケットからメダルを取り出した。

「尾形、そのメダルなに？」

「これか？こいつは俺が小5の時に海外に引越すことになったときアキが俺にくれたものだ」

「あ！そのメダル僕が小学校の時に集めていたメダルだ！」

「どうやらメダルには覚えがあるようじゃの」

「このメダルすごくレアで僕の宝物だったんだけど…いつの間になくなってたんだよね、…そう言えばどうしてなくなってたんだろ？ メダル… 小5… 転校… 尾形龍介… あ！尾形龍介ってもしかして隣に引越してきたリュウくん？」

「やっと思い出したか」

明久はメダルを見てようやく龍介のことを思い出す。

第0章第10話

「そうかりユウ君だったにか、ごめんね忘れてて」

「別に、予想どおりだったから気にしてないよ」

「それはそれで困るけど…」

「事実忘れてただろう?」

「まあ、そうなんだけどね（苦笑）」

明久は龍介に忘れてたことを謝り、龍介は予想どおりだから気にするなと笑い、明久はそのことに困った顔をするが、事実のため苦笑いする。

「だけどリュウ君も雰囲気随分と変わったね」

「そうか？自分ではそんなに変わったって自覚はないんだがな　あと俺のことは龍でいい」

「変わったよ、あの頃は僕より小さかったし、まるで女の子みたいだったじゃないか」

「そう言えば、あの頃はそうだったな」

明久は龍介の雰囲気昔と変わっていると言い、龍介は自覚が無いのか首をかしげるが、明久に龍介は昔は背が低くよく女の子に間違われていたと話し、龍介も心当たりがあったのか納得する。

「引越してから急に成長期がきたからな、背だつてだいぶ伸びたし、運動もしたから筋肉もついたからな、そう考えれば確かにあの頃からはだいぶ変わったな」

「でしょ、だから全然気づかなかったよ」

「気づかなかったんじゃないかって忘れてたんでしょ？」

「そ、そんなこと無いよ！ただ僕は龍の雰囲気がいかに違っていたから分からなかっただけで、忘れただなんてそんな失礼なことあるわけ……」

「さっき自分で『ごめんね忘れてて』って言っていたとおもつたやが……」

「あれ？そうだったけ？」

明久は龍介の雰囲気が変わっていたから気づかなかったと言い、美波に気づかなかったのではなく忘れていただけだろうと指摘され、明久はそんなことはないと言うが秀吉にさっき忘れていたことを龍介に謝っていたことを指摘され、しかし明久はそのことも忘れているのか困った顔をする。

「ほんの数分前のことなのにもう忘れたわけ？」

「流石は明久、俺たちの予想を遥か上に行くバカだな」

「……………虫並みの記憶力」

「みんな酷いよ!!!」

「友達を忘れていたお前のほうがよっぽど酷い」

「うっ、そりゃそうだけどさ…」

美波、雄二、康太の3人は明久の記憶力の無さに呆れ、口々に明久を馬鹿にし、それに明久は怒るも雄二に龍介のことを忘れていた明久のほうが悪いと言われ反論出来ず落ち込む。

「まあまあ3人もそれぐらいにしといてやってくれ、俺は全然気にしてないから、だから明久お前もそう落ち込むな、な？」

「…うん、ありがとう。本当に忘れててごめんね」

「だから良いつて」

龍介は3人に自分は気にしてないから明久をこれ以上責めないように言い、明久も改めて謝り、龍介も明久に気にするなと答える。

第0章第11話

「しかしまさか龍介が明久と知り間だったとはな、…こいつは面白いことになりそうだぜ」

「坂元、言っておくが俺を使ってアキをはめようたってそうはいかないからな」

雄二は龍介が明久の知り合いなのを知り何か思いついたようだが、先に龍介にお前の思いどおりにはならないぞと釘を刺される。

「何言ってるんだ、俺はそんな事ちつとも考えちゃいないぜ」

「嘘つけ、顔に悪いことを思いついたって書いてあるぜ」

「何を根拠にそんな事をいえるんだ？」

「俺はカウンセリングやファイリングの知識もあるんでな、人の心はある程度読めるんだよ、だから悪いが俺に嘘は通じない」

雄二は当然のようにとぼけるが、それも龍二に見破られ、雄二は龍介にそこまで断言できる根拠を尋ね龍二はカウンセリングやファイリングの知識もあることを話す。

「ちょっと尾形、あんたそんなことまで出来るわけ？」

「ああ、そういうのにも興味があつたから勉強したんだよ、幸いいるんな専門家の先生や研究者の人と話す機会には恵まれてたからな、そしたら出来るようになったんだ」

美波は龍介が科学者としての才能の他にカウンセリングやファイリングの知識まであることに驚き、龍介は興味があったから勉強したら出来るようになったと話す。

「そんな簡単に言うけどそれってすごいことじゃないの？」

「そうか？別に俺は好きだったから勉強しただけでそんなすごいとは思わないけどな」

簡単な事のように言う龍介に美波はそれはすごいこよなんじゃないかと言い、あくまで自分の好きなことをやっただけの龍介は美波の反応に首をかしげる。

「それをすごいと思わないところがいかにも龍介らしいのう」

「そうだよね、龍ってどんなにすごいことでも自分のことになると大したこと無いつて言って謙遜するんだよね、秀吉と遊んでたころもそうだったの？」

「うむ、龍介のそう言うところは昔からじゃ」

共に龍介の知り合いである秀吉と明久は龍介の性格が変わっているという共通の話題で盛り上がっていた。

「ところで尾形の成績ってどんぐらいなの？」

美波の質問により今度は龍介の成績に話題が代わる。

「試験召換システムのメンテナンスを手伝えるぐらいだし、頭良い

「んでしょ？」

「そうでもないさ、さっき受けたテストもイマイチだったしな」

美波はこれまでの龍介のすごさを見て当然成績も良いんだろうと言
い龍介はテストの出来に満足して無いと答える。

「ふん、Fクラスに来るようなやつが成績いいわけないだろう」

雄二は龍介もFクラスなのだから成績がいいわけないと突っかかる

第0章第12話

「ちょっと坂元、あんなに言い出してんの？尾形の話聞いてた？あの話聞いてどうして成績が悪いなんて思えるわけ？」

「そいじゃぞ雄二、お主も先ほどの龍介の話は聞いておったじゃろう？なぜそんな事を言うのじゃ？」

先程からの龍介を見ている美波と秀吉はそれを見ていたはずの雄二がなぜ龍介の成績を疑っているのか分からないように雄二に質問する

「システムの開発やカウンセリング、プロファイリング、どれもただこいつが話しているだけで証拠になるようなものは何一つない！つまりこいつが適当なことと言っているだけで成績もそんなに良くない可能性だって十分にあるわけだ」

雄二は先程までの龍介の能力は龍介のでまかせなのでと疑っているようである。

「別にわざわざそんな事する必要ないじゃない、どうしてそうやってムキになろうとするわけ？」

「そいじゃぞ、今ここで嘘をついたところですからバレルじゃろう、いくらなんでも雄二のは強引過ぎるのではないかのう？」

美波と秀吉は龍介がすぐにバレる嘘をつく理由がないと言って反論する。

「まあ2人も一旦落ち付け、確かに俺も証拠になるようなものは

出してないかな、坂元が疑うのもまあ無理の無い話だ」

龍介は自分にも問題はあったといい2人に落ち着くように言う。

「別にお前が俺のこと疑おうが構わないが成績のことを疑われたままにしておいて仕事に影響が出て困るし、良いだろうそんな言うなら 証拠 見せてやるぜ」

「へえー いったい何を見せてくれるんだい？」

龍介は自分への疑いが『特別風紀委員』の仕事に悪影響を及ぼすことを危惧しているようで雄二に証拠を見せると言い、龍介のことを疑っている雄二は龍介がうまく挑発に乗ったと思い、余裕の表情で龍介に証明方法を尋ねる。

「坂元昼休みに俺と模擬試召戦争をやるう」

「模擬試召戦争だと？」

龍介の証明方法は龍二との模擬試召戦争による一騎打ちであった。

「システムやその他の資格のことはすぐに証明するのは無理だからな、成績のことを証明するなら模擬試召戦争が一番わかりやすいだろう」

「あれ？でも龍って試召戦争に参加できないんじゃない？」

「その事なら問題ない、俺が参加できないのは本番の試召戦争だけだ、模擬試召戦争なら俺も参加出来る」

明久は龍介は試召戦争に参加出来ないのではと疑問に思うが龍介は参加出来ないのは本番の試召戦争だけで模擬試召戦争なら問題ないと答える。

「そっかそれなら問題ないね。でも先生たちの許可なんておりるかな？」

模擬試召戦争にも立会いの教師の承認が必要である

「それこそまったく問題ない、『特別風紀委員』である俺には召喚フィールドを展開する権限があるからな」

「えっ！そうだったけ!？」

どうやら明久は龍介が試召戦争に参加できないことは覚えていたようだ、召喚フィールドを展開出来ることは忘れていたようだ。

「どうして一緒に説明したのに1つしか覚えていないわけ？」

「仕方ないだろう？明久なんだから、同時に2つのことは覚えられないのさ」

「……………やっぱり虫並みの記憶力」

美波は1つしか覚えていない明久に呆れ、雄二と康太はまた明久のことをバカにする。

「みんななんかキライだ!!!!!!」

散々な言われように明久はいじけ出す。

第0章第12話（後書き）

どうも作者です。

木曜日は更新出来ずゴメンナサイ、宿題に追われていて11話書いてたら日付変わってしまいました（苦笑）

ただでさえ遅い更新ペースが学校がまた始まるせいでさらに遅くなりそうです。

読んでいただいている方には本当に申し訳ないです。

感想を書いていただけた方々本当にありがとうございます

誤字は無くせるように努めますがまだまだ未熟なもので誤字に気づかないこともあると思いますのでその時はまたご指摘いただけたら幸いです。

こんなダメダメな作者ではありませんが始めた以上は途中で投げ出すつもりはないのでこれからも読んでいただけたら幸いです。

感想&質問お待ちしております。

第0章第13話

「明久の事なんてどうでもいい、それより今は模擬試召戦争の方が大事だ、だが一つ聞きたいことがある」

雄二はいじける明久を無視して話を進める。

「なんだ？」

「なんで俺がお前と戦う必要がある？俺はお前に証明になるようなものを見せると言ったが、別に俺がお前と戦う必要は無いだろう、なぜ模擬試召戦争にこだわる」

雄二は龍介に龍介の成績の証明に自分は戦う必要は無いのでは？と言い、模擬試召戦争をする理由を尋ねる。

「確かに成績を見せるだけなら今ここで召喚すればそれですむんだが…まあ理由は2つだ」

「聞かせてもらおうか」

龍介は理由は2つあると言い雄二も説明を促す。

「まず1つ目は俺が召喚獣の扱いになれるためだ」

「どづいつことだ？」

「俺はまだあまり自分の召喚獣を使ったことがないからな、悪いがお前には俺の練習相手になってもらう」

「…召喚獣の扱いに慣れてないのに模擬試召戦争を申し込むとはなめた真似してくれるじゃないか、良いのか？俺はもう3クラスとの試召戦争を経験してるんだぜ」

「お前は代表だから主に指揮を執っててほとんど召喚してないだろう？なら条件はそんなにかわらないはずだぜ」

「ふん、調子に乗っていられるのも今のうちだぜ」

「坂元、その台詞すごく三下臭いぜ」

「うるせー！」

「まあ良い、2つ目の理由だが、それは、まあ…仕事だよ、『特別風紀委員』としてのな」

「？ どうゆうことだ？」

「お前は新学期早々試召戦争を仕掛けたA級戦犯だ、今後のためにもお前にはここで1つ指導しとくべきかなと思ってな」

「別に新学期早々試召戦争を仕掛けちゃいけないなんて決まりは無いはずだぜ？いくらお前が『特別風紀委員』だからって口出しされる覚えはないぜ」

「決まりに書いてなければ何をしても良いってわけじゃないだろう、子供かお前は？もつと常識を持て、

試験召喚システムは生徒にやる気を起こさせ学力の向上を目的としたものだ、努力もしないで上位クラスの設備を狙おうなんてこの学

園の教育理念に反する真似『特別風紀委員』として見逃せるわけ無いだろう」

「そうは言ってもちゃんと学園長には承認してもらったぜ？」

「……学園長は教育者よりも科学者よりだから……あらかた面白がって大して考えることも無く承認しちまったんだろう、それに關しちゃこちらの落ち度だ」

龍介は藤堂 カヲルの失態に『特別風紀委員』として、そして身内として頭を痛めた。

「で、結局どうするんだ？模擬試召戦争受けるのか？受けないのか？別に受けなくたって俺は構わないが……良いのか？」

「何が言いたい？」

「お前は俺がバカだと思っっているんだろう？なら俺に負けるはず無いよな？それなのに俺の模擬試召戦争を断りでもしたら“坂本雄二はバカにした生徒に負けるのを恐れて模擬試召戦争を断った小心者”なんて周りから陰口叩かれるんじゃないか？」

「なんだと！？」

「別にいいぜ？模擬試召戦争やめても、お前が俺と戦ったってお前に何の得も無いんだし、俺は負ける気なから、恥をかきたくなかつたら断つといたほうが身のためかもよ？」

「なめたこと言ってくるじゃねえか！！！！俺が負けるのを恐れて

るだつて？そんなわけあるか！！！！いいだろう、お前の模擬試合戦争受けてやるぜ！！！！」

「なら今日の昼休みに屋上で行う、科目はどうする？」

「へっ、何だつて構わないさ、俺は負けないからな」

「なら総合科目でどうだ？」

「問題なぜ！…そうだムツツリーニ、このことを全クラスに伝えてくれ、大勢の前でこいつに恥をかかせてやる！！！！」

「……………分かった」

「いいのか坂本？恥をかくのはお前かもよ？」

「うるせー！俺をバカにしたこと後悔させてやるぜ！！龍介、俺が勝ったらみんなの見てる前で土下座して謝ってもらうからな！！！！」

「別に構わないぜ、俺は負けないからな、その代わり俺が勝ったら俺の言うこと聞いてもらうぞ？」

「ああいいぜ、そんな事は絶対無いからな、で、俺は負けたらなにをすればいいんだ？」

「俺の仕事の邪魔にならないように大人しくしていてくれればそれでいい」

「なんだそれだけか？」

「ああ、お前が大人しくしてくれるのが俺にとって一番メリットになるんでな」

「いいぜ、なんなら俺が負けた時はお前の使い走りになってやろうか？」

「坂本、大丈夫なのか？自分で自分の首を絞めるような真似していいのか？」

「俺が負けることはないからもんだいない」

「……まあ、お前がそうしたいならかってにしな」

こうして龍介VS雄二の模擬試召戦争は行われることが決定したのだった。

第0章第14話

(しかし坂本のやつかつて神童と呼ばれてたと言っからどれほどの男かと思ったら案外簡単に挑発に乗ってきたな)

龍介は雄二があっさり挑発に乗ってきたことに呆れていた。

「…龍介、お主龍二を嵌めよったな？」

雄二が龍介から離れていっってから秀吉はそう言っって龍介に話しかけてきた。

「？なんのことだ秀吉」

「とぼけるでない、お主最初は雄二の方が挑発してきたのにいつの間にか逆に挑発し返しておったじゃろう？」

龍介はとぼけるが秀吉はそんなはずは無いだろうと言っ。

「わしの知っっているお主なら相手の意見に反応せず静かにことを終わらそうとするはず…わざわざ雄二を挑発してまで模擬試召戦争を仕掛けたのはなぜじゃ？」

「模擬試召戦争をするメリットならさっき話したはずだぜ」

「成績のことを悪く言われてムキになるなどお主らしくない…それだけの理由でお主があんなことをするとも思えん…お主一体なにを考えているのじゃ？」

「…さすが秀吉だな、長いこと会ってなかったと言つのに俺の考え
ていることはおみとうしか」

龍介は秀吉に自分の考えを読まれていることに苦笑する。

「だが別にそこまで大した理由もないさ、たしかにさっき話した以
外にも理由がないわけじゃないんだが話すことでもないさ、だから
心配するな」

龍介は何か他に考えがあることは認めるも大したことではないと言
い話そうとはしない。

「…お主がそう言うのならわしもこれ以上は追及せんが…」

「ああ、そうしてくれると助かる」

秀吉も龍介が言わないのなら聞かないと言つが…

「じゃが…」

「ん？どうした秀吉？」

「いや、ただ少し寂しく思ってしまったの」

「え！？」

「久しぶりにお主に会えた、わしにはお主が何かしら考えているこ
とが分かる、それなのにお主はわしにはその考えを話してはくれな
い…いや、お主のことじゃわしに話したくない理由があるのじゃろ
う…だからわしもこれ以上は聞かない…じゃがやはり親友に話して

もらえないことがあるのは少し寂しく思ってしまったの…」

「ちよつ！秀吉、いきなりなに言い出してんだよ！そ、そんな模擬
試召戦争の理由を話さないからってそんな落ち込むなよ！」

（あれえ？俺ってそんな秀吉の落ち込むような事いつたけ！？）

いきなりまるでもっと深刻なことを友達に話してもらえず疎外感や
自分の無力さに打ちひしがれたような表情になった秀吉を見て珍し
く慌てる龍介

「なんての、うそじゃ」

「はあ？」

「驚いたかの？わしの迫真の演技は？」

「演技つてお前…」

そう！これは秀吉の演技だったのである！

「脅かすなよ！いきなりシリアスに落ち込みだすもんだからちよつ
と本気でびびつちまたじゃねーか！」

洞察力に優れた龍介なら本来なら秀吉の演技に騙されることは無か
っただろう。しかし今のはあまりにも急すぎたのである。

「お主がわしに話してくれぬのが悪いのじゃ」

「いやあーそのおー…だから本当に話す事じゃなくてな…」

「うそじゃな(きつぱり)」

「うっ」

秀吉にうそは通じないのである。

「まあ良い、お主がそこまで言うならこれ以上聞くのも無粋と言うものじゃ、何も無いということにしておこつ」

「…すまないな秀吉」

「よいのじゃ、さっきのお主の驚いた顔をみたら少し気も晴れたしのっ」

「本当にビックリしたぜ。流石は演劇部のホープだな」

「なんか照れるが…でも演技を褒められるのは嬉しいのっ」

龍介は先程の秀吉の演技を褒め、秀吉も演技のことが褒められるのは満更でもないのか、照れくさそうに笑う。

「では、今日の昼休み、雄二との模擬試召戦争、楽しみにしておるぞ」

「ああ」

「と言っても、お主なら心配ないじゃろっが」

「流石にそれは買いかぶりすぎだぜ秀吉。坂本の前では強気に出て

いたが今回の試験は本当に調子が悪かったんだ。坂本もかつては神童と呼ばれた男だ、総簡単にはいかないさ」

「やはりそうやって謙遜するほうがお主らしいのう」

「だから謙遜じゃないって」

「お主がそういうのならそう言う事にして置こう。それでは楽しみにしておるぞ」

「ああ、応援してくれ」

そういつて秀吉は向こうで話している明久と雄二のほうに行った。

(いやーしかしさっきのはびびったな)

龍介を欺くなど本来ならそう容易いことではないのである。

(だがすまないな秀吉、坂本との勝負を仕組んだもう一つの理由は公平な立場でなければならぬ『特別風紀委員』にはあるまじき俺の個人的な感情に因るものだからな、他人に話すのはやっぱりまずいんだよ)

…坂本、お前がアキに酷い事をしてるってことは俺の耳にも届いているんだ……

アキを虐めたことしつかりと反省させてやるからな……！)

心の中で雄二への怒りを露にする龍介、どうやら雄二のいつも明久に対しての行為に怒っているようだ……いったいどうしたのだろ

うか？明久を擁護する龍介……いったい2人の間になにがあったの
だろうか？

第0章第15話

昼休み

屋上には康太の宣伝により多くの観客が集まっていた。

「いよいよ始まるのね」

「そうじゃのう」

「たのしみだね」

美波、秀吉、明久の3人もこれから始まる戦いを見に来ていた。

「秀吉はどうなると思う？」

「わしの知っている龍介なら雄二に勝ち目は無いじゃろう」

「だよねえー、龍が相手じゃ雄二に勝ち目なんてないよね」

龍介の実力を知る2人は雄二に勝ち目は無いと考えている。

「あつ、2人ともそろそろ始まるみたいよ」

「だいぶ観客が集まったみたいだな、どうする尾形？降参するなら今のうちだぜ？お前だって転校初日からこの人数の前で恥をかきたくはないだろう」

「自分から仕掛けといて降参なんかするかよ。俺にとっちゃこれは

仕事だしな、自分で作った仕事をいきなりサボる気はねえよ。それよりお前のほうこそ大丈夫なのかよ？小学校レベルの歴史のテストで53点の坂本雄二君？大勢の前で恥を晒すのはお前のほうじゃないのか？」

「……随分と余裕じゃねえーか」

本当のことを言われ苛立つ雄二。

「そんな口利いていられるのも今のうちだぜ」

「だからそれ、三下臭いから」

「う、うるせえ！」

完全に龍介にペースを握られていた。

「坂本準備はいいな？」

「ああ、いつでもいいぜ」

「では、これよりFクラス代表坂本雄二VS Fクラス尾形龍介の模擬試召戦争を始める。」

『特別風紀委員』の権限により模擬試召戦争を承認、召喚フィールド展開。」

屋上に召喚フィールドが展開される。

「尾形、俺に喧嘩売ったこと、後悔させてやるぜ……！」

「いいぜ、いつでもかかって来な」

「へっ、その余裕がいつまで持つかな！いくぜ試獣召喚^{サモン}！」

掛け声と共に雄二の召喚獣が現れる。改造学ランにメリケンサックを装備したいかにも不良といった格好である。召喚獣の頭の上に点数が表示される。

「って、雄二、その点数はいったいどう言うことだよ!？」

Fクラス 坂本雄二 総合科目 1937点

「それってAクラスの平均近い点数じゃないか、どうして雄二がそんな点数取れるんだよ!？」

「俺は前回の試召戦争以来、Aクラスに勝つために本気で勉強しているんだよ」

「でも、なんで?」

「前に翔子にきかれたんだ。……………式はどこで挙げたいか、ってな」

「……………」

「俺はもう負けるわけにはいかないんだ!でないと、俺の人生が終わってしまう!」

「雄二、分かったから!落ち着いて!」

明久になだめられ雄二も落ち着きを取り戻した。

「……たしかに俺はAクラス戦のときは油断して小学校レベルの歴史のテストで53点しか取れなかった、お前はその事を聞いて俺なんか楽勝で倒せるとおもったんだろうが……甘かったな！俺はもうあの時の俺じゃないんだ！悪かったな！」

「あの時って、まだあれから1、2週間ぐらいしかたってないんだけど……」

「流石はかつては神童と呼ばれただけのことはあるみたいだな。……なるほど確かに俺はお前の事を少し舐めてたみたいだな」

「尾形、俺に喧嘩売ったこと、後悔させてやるぜ」

「いいぜ、全力で相手してやる。試獣召喚^{サモン}！」

掛け声と共に龍介の召喚獣が現れる。その姿を見て……

「……なんか、すごいかつこうね」

「……そう言えば龍ってこう言うところあったね」

「……そうじゃったの」

3人とも呆然としていた。現れた召喚獣の格好はというと……とにかくすごかった。髪は銀髪に染められており、目には青と赤のカラーコンが付けられておりオッドアイになっていて、腕にはシルバーのチェーンがまかれており、改造制服にでかでかとか俺は新世界の神となる>>プリントされたマントを羽織っていた。……はっき

り言っとても中2病臭かった、と言っよりとても痛い格好だった。

第0章第15話（後書き）

更新遅れてすみません。

実はテスト期間に入ってしまった。

なのでしばらく更新が出来そうにありません。

こんな中途半端なところで申し訳ありませんがテストが終わったらまた再開しますのでよろしく願います。

第0章第16話

俺が召喚すると、場の空気が変わるのを感じた

(あれ、どうしたんだ？みんな急に静まり返って……、あつ！なんじゃありゃ〜)

みんなが急に静まり返った理由、それは俺の召喚獣の格好にあった。その格好と言うのは

髪を銀髪に染め、目には青と赤のカラコンを付けオッドアイにし、腕にはシルバーのチェーンを巻き、改造制服にでかでかとかく俺は新世界の神となる>とプリントされたマントを羽織っていると言うあまりにも中二病くさく、痛々しいかつこうであった。

(何でこんな格好を……あつ！そうだ、召喚獣のデザイン設定の調整をしてそのまま元に戻すのをわすれてたんだ)

なんてこった、周りの視線が痛いぜ……

「……随分と個性的な格好だな」

坂本が呆気にとられながらもそう言うてきた。

「……これはだな、その、なんと言うか……ちょっとした間違いだ」

「間違いつて……どう間違えたらそんな事になるんだ？」

「新規デザインのテストをしていて、その時に設定を元に戻すのを

忘れてたんだよ」

あん時は意外にデザイン作成の自由度に興奮しちゃって、ちょっとやりすぎちゃったからな

「にしたって、その格好はあんまりだろ……お前どんなセンスしてんだよ」

「これはあくまで機能のテストをするために作ったやつで、生徒用の召喚獣のデザインはまともだし、これだって俺の趣味ってわけじゃねえよ！」

いくらなんでもアレは無理だから、それにしても改めて見てみると、まあ〜痛々しい格好だよ。自分で造っておいてなんだが流石に引くぞアレは……いくら興奮してたからと言ってあんときの俺はどうかしてたぜ。

「どうしよう秀吉、僕なんだか急に不安になってきたよ……」

「奇遇じゃのう、わしもそうなんじゃ……」

マズイ！俺の召喚獣を見てアキと秀吉がひている！ これはなんとかしなければ……

「だ、大丈夫だアキ、秀吉、見た目はこんなんだが坂本には負けないから！」

坂本なんかはどう思われようが知った事じゃないが、あの2人に疑われるのはマズイ！

「……大丈夫だよ龍、君がどんな趣味でも僕は龍の友達だから」

「……そうじゃ、むしろ2人がおる、だから心配ないぞ」

「どうしよう、2人の目が優しい」

「だ、だからこれはミスでけして俺の趣味とかじゃなくてだな……」

「……大丈夫、僕は分かってるから」

俺は今日、何か大切なものを失ってしまったようだ

「……まさか尾形が……ねえ、意外だわ」

「……これは予想外」

「世の中完璧なやつなんていないと言っことが」

周囲の視線が俺に突き刺さる

(こいつはとんだミスだぜ……)

これからの仕事に影響がでそうだな……転校早々にイタイ失敗しち
まっただぜ

「おらおら、戦争はもう始まってんだぜ、余所見してると先にやっ
ちまっぞー!」

「なっ!」

この事態に頭を痛め呆然としていたところをチャンスと見た坂本は攻撃を仕掛けてきた。俺は慌てて剣で攻撃を防ぐ。

ちなみに俺の武器はと言うと……こいつもまたかなり問題があった。

そいつはでかいだけで実用性皆無な、なんか「たとえ龍が相手でもこの剣なら一刀両断！」とか、そんな感じのキャッチコピーが付いてそんな無駄に馬鹿デカイ大剣だった

「遅いぜえええ」

雄二の召喚獣のメリケンサックが俺の召喚獣の剣と衝突する、そして……

「え？」

攻撃した雄二の召喚獣のほうが逆に跳ね返され、吹っ飛んでいった。

第0章第16話（後書き）

みなさんお久しぶりです。

やっとテストが終わりました。

……実を言うとテスト自体は先週で終わっていたんですが努力虚しく思ったほどの結果が出せずパソコンが使えなかったのです。

なのでこんなに更新が遅れてしまって申し訳ないです。

その上休日ぐらいいしか更新できそうに無いような状態になってしまいました。

もともと更新は遅かったですですがさらに遅くなりそうです。

本当に申し訳ないですがそれでも完結するまでは更新は続けますのでよろしくお願いします。

第0章第17話

「なんで俺の召喚獣が吹き飛ばされるんだ!？」

「今の攻撃、完全に雄二の方が優勢だったのに……あつ!雄二、龍の召喚獣の点数を見て」

「点数?……なつ、なんじゃありやあああ」

俺の召喚獣の頭上にプログラムに何か問題があったのか今まで表示されてなかった点数が表示されていた。

Fクラス 尾形龍介 総合科目 7267点

「ちよつ、おい尾形、その点数はどういうことだ?」

坂本は驚きながらそう聞いてきた

「どっ？ とはどっ言う意味かな？」

「とぼけるな」

あえてとぼけて見ると案の定坂本は質問を続けてきた

「7000点越えなんて学年主任並だぞ どうしてそんな点数がとれるんだ？」

坂本のやつ驚いてやがる……

まあ、そりゃそうだろうな、こんな痛々しい格好した召感獣の使用者の点数がこんなにあるとは思っまい

……まあ、この格好はあくまで不慮の事故で俺も想定外だったかな

「こんぐらいで驚くなよ、言っただろ？今回は調子が悪かったって、いつもなら8000点ぐらい取れる」

「なに!？」

本当はそうでもないんだがここは召喚獣の格好のせいで一気に落ちてしまった俺のイメージ回復と坂本を挑発するためにあえて大げさに言っただけ。

「龍の事だから雄二なんて敵じゃないとは思ってたけど……まさかここまでとはね」

「そっじゃのう、わしもまさかこれ程とは思わなかったぞい」

アキと秀吉も感心してくれてる

……よし、これで少しはさっきの失態を挽回出来たか

「さてと、俺もこれ以上この召喚獣を晒しておくのもつらいんで、ささっと決めさせて貰うぜ」

俺はそう言っつて召喚獣を操作し坂本の召喚獣に攻撃を仕掛ける

「だが、そんな馬鹿デカイ剣扱いきれるのかよ？」

そう、問題はそこなのである。今俺が使っている武器はさっきも書いたように実用性皆無な大剣なのである

「いくら点数が高かったって攻撃が当たらなきゃ意味無いぜ？」

確かにこんな重いものを持ってたんじゃフットワークの軽い坂本の召喚獣の攻撃を避けるのは難しいだろう。逆にいくら点数が劣っていないと当たれば点数は削られる、何度も攻撃を受ければ俺の召喚獣もやられてしまうだろう、そこで俺が取った行動は……

「おりゃよっつと」

「なっ！」

まずは坂本の召喚獣めがけて剣を投げつける事だった

「あぶねっ、」

雄二も当然だがそれを避ける　まあ別に今は当てるために投げたんじゃないから別に構わん

「てめえ、なんてことしあがる！」

「使いにくい武器、いつまでも持っているより無いほうがマシだと思っただ」

「だったら普通に置けよ！わざわざこっちになげるな！」

「ちょっとしたプレゼントさ」

「いらねえよこんなプレゼント！」

俺が剣を投げたのは武器持つてるよりか素手のほうがまだ強いんじゃないかね？って思ったからで、じゃあなんでその場に置かずに投げつけたかと言うと……まあそこまで大した理由もない、ちょっとした気

分ってやつさ

「しかしお前、丸腰で俺と戦うつもりか？」

「お前だって似たようなもんだろ」

「失礼な、俺はちゃんと武器持ってるぞ」

確かに着けてはいるな………メリケンサックを

「坂本、お前かつては悪鬼羅刹とか呼ばれてたらしいな、だったらここは男らしく拳でタイムンと行こうじゃないか」

「まさかお前がそんな懐かしい呼び名を知っているとわな、いいぜ相手してやる」

「それじゃ勝負を再開するぞ、スタート」

そうして俺と坂本の戦いは再開したのであった

第0章第17話（後書き）

昨日更新できなくてごめんなさい

なかなか終わらない二人の戦い……

次回の更新ぐらいには終われるようにしたいと思います。

感想お待ちしております。

第0章第18話

「行くぞ坂本」

俺は召喚獣を突撃させ、坂本の召喚獣に殴りかかる

「甘いぞ！」

しかし坂本は俺の攻撃をバックステップで避ける

「いくら点数に差があるからって正面から突っ込んで流石に当たらないか」

「へっ、舐めてもらっちゃこまるぜ」

さっきの反射ダメージで坂本は点数を消費している、この点数差ならあと一撃入れれば勝負が付く、なら……

「今度はこっちの番だ、いくぞ！」

俺が考えているうちに坂本が反撃を仕掛けてきた

「おっと、そうはいかないぜ」

当然俺はその攻撃を避ける

「避けんじゃねえー」

その後も雄二は攻撃を仕掛けてくるが、この点数差では機動力に差がありすぎる、坂本の攻撃はさつきからまったく俺に当たらない

「くそ！おい尾形、逃げてばかりいないで戦いやがれ」

「これは戦争だぞ、勝つためには手段を選ばない、お前だつてした事だろう？」

「なっ、」

しかしこれ以上長引かせるのもまずいか……さつきから周囲の視線が痛い、これじゃ作戦は失敗だな……

俺がこの模擬試召戦争を仕掛けた理由は2つ、1つは騒ぎの元凶である坂本にお灸を据えられること、2つ目は生徒たちに『特別風紀委員』の存在を良く知ってもらって今後の活動がスムーズに行えるようにすること、だが例の格好のせいでいきなり印象が悪くなっ

まった：こいつは今後の活動に支障がでそうだな……まいったな

それよりもまずは、そろそろ決着を着けるか

「逃げてないで真面目に戦いやがれえー」

いい加減切れてきた坂本が思いつきりつ込んできた

「そうかいだったら……これで終りだ」

「なっ！」

俺はさっきまでよりもさらに速く攻撃を避けそのままカウンターを打ち込んだ

坂本雄二 0点

「坂本雄二戦死により模擬試召戦争終結」

俺のコールとともに召喚フィールドも閉じる

「一発も当てられなかった……くそ！」

坂本の奴相当へこんでるな、まあこんな格好した奴に負ければ無理もないか、しかしあいつが真面目に勉強しているとは意外だったな、動機が少し気になるが……このまま大人しくなってくれば良いんだがな……」

「まっ、これで俺の実力は分かって貰えたかな？だがお前が勉強してきているとはな、正直驚いたぜ、見直したよ、さっきは俺もいる言って悪かったな」

そう言っって頂垂れている坂本に手を差し伸べる

「……けっ、まあいいぜ」

そう言っって坂本は俺の手を掴み立ち上がった

「同じクラスなんだ、これから頼むぜ、代表」

「ふん、一回勝ったからっていい気になるなよ、いつかこの借りは返すからな」

「ああ、いつでも待ってるぜ」

こうして俺と坂本の模擬試合戦争は幕を閉じたのだった

第0章第18話（後書き）

どうもみなさん作者のタケルです。

ようやく雄二戦終結、まさかこんなにかかるとは思わなかった……

相変わらず週1でしか更新できませんがこれからもがんばっていきますのでよろしくお願ひします。

感想お待ちしております。

報告

バカとテストと風紀委員を読んでくださっている皆様どうも作者のタケルです。

皆様に報告しなければならぬ事があります。 実はしばらくしてから期末テストが始まるんです。

前回の中間テストが努力虚しく無残な結果に終わってしまい親にテストが終わるまでパソコンの使用を禁止されてしまつて更新が出来なくなつてしまいました。ただでさえ更新が遅いのですが、2週間ほど更新が出来ません。大変申し訳ないですがしばらくお待ちいただけたら幸いです。失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8558s/>

バカとテストと風紀委員

2011年10月9日00時26分発行